平成２８年度　夏期研修レポート　「子どもはみんな問題児」を読んで

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　遠藤　貴子

　この本を読んで、現場のリアルな内容に共感することばかりで、その中でも何気ない日々の１つ１つの大切さに改めて気づかされることもたくさんありました。

　私は働き始めて４年目の年長担任2回目まで、クラスみんなの足並みを揃えることに必死。行事も常に目標まで全員を持っていかなければ…と勝手に思い込み、時にプレッシャーに感じて１人で焦ることもありました。しかし、５年目の年少担任、そして初めての学年主任という転機に私の子どもたちへの見方や気持ちが変わったのがこの年でした。最初は机に乗って走り回る子、叱っても笑っている子、そして子どもに部屋から閉め出されることもあり、年長からの年少は違った意味での戦いの日々。でも、学年主任になって全体的にいろいろな先生達の保育を見て、客観的に他クラスの子ども達のいろいろな姿を見て、そして自分のクラスに戻った時に、年少さんは初めてのことだらけ。だから知らないのも当たり前で、これから学ぶのが当たり前。だからこそ幼稚園という初めての集団生活の場での１つ１つが大切なんだとそう思った時に、関わり方や１人１人のペースを大切にしたり１人１人の個性を大切にすることが大切である本当の意味が分かったような気がしたのがこの年でした。そしたら“あの子は大変”から“ここが面白い個性だな”と見方も変わりました。次の年、年長に戻った時に１年前の年長をやっていた時の自分と保育をするにあたっての心構えや目標、すべてが変わっていました。

　保育には答えがあるものではないので、７年目になっても日々勉強で、悩むこともあるが、間違っても４年目までの良い子を求める保育ではなく違った見方で保育をしていきたいと改めて思いました。もちろん１つでも多くのことや気持ちを子どもたちに教えていきたいと思っているが、最高の褒め言葉である子どもらしくを目標に、そのためには人と人との関わりの中で気持ちをぶつけたり喜怒哀楽を出しながら大きくなっていけるようサポートをして、また１人１人の個性を大切に楽しく保育をする。その中で子どもたちの生涯の幸せや生きる術の力になっていけたらいいなと感じました。先生として、人として子どもたちにそういう保育をしていきたいと思いました。

　そして、お家の方の中には、子どもに対し可愛いよりもイライラしてしまうと言う方や愛情不足なんです。と堂々と言う方も少なくないので、ぜひお家の方に読んでもらいたいな。と強く思いました。